日本の児童養護理論に関する研究
－ホスピタリズム論と施設養護－

○　立教大学大学院　　片岡志保（会員番号 07485）

キーワード：児童養護理論、ホスピタリズム、施設養護

１．研 究 目 的

本研究は、現在の日本の児童養護理論の探究に向けて、日本におけるホスピタリズム論に関する文献を検討し、①ホスピタリズム論の持つ子ども観や施設養護実践観を整理すること、②実践への影響を明らかにすること、③ホスピタリズム論が実践に生かされなかった要因を考察することを目的とする。

現在の児童養護施設（以下、施設）は、その「あり方」や「将来像」が問われ、具体的な姿が追い求められている。背景には、施設がいくつもの問題を抱えているという事実がある。筆者は問題解決の糸口のひとつに「勤続年数の短さ」があると考える。継続して働くために、たとえば、“子どもたちの養育が困難だ。けれども～～”という思考が求められる。思考の転換のためには「養育の困難さ」に対する科学的な知識と、その知識をもとにした職員集団の実践によって「養育の困難さ」が改善されていくという出来事の体験を通して労働に展望を持つことが、必要となろう。個々人の科学的知識をもとに、集団によって実践を行うには、実践を貫く理論が求められる。提示された理論が実践に生かされるには、現場の職員による理論と実践の討議や検証などが行われなければならない。

児童養護理論に関しては、1950 年に堀文次が発表した論文が画期となり、いわゆる「ホスピタリズム論争」が繰り広げられた。1960 年当時、バット博士記念ホームの園長だった大谷嘉朗は「ホスピタリズム論」について「ある意味で非常に否定的破壊的な議論であって、そこには宿命論的な暗影すらつきまとったと考えさせられる側面があった（中略）逆説的ではあるが、ホスピタリスムス養護理論もまた、戦後の児童福祉理論と実践の歩みの上に果すべき建設的役割をもっていたということははっきりいえる」（大谷 1960）と評している。果たして、何が「否定的破壊的」であり、何が「建設的」であったのか、理論構築の上で再検討することは欠かせない。

２．研究の視点および方法

筆者は、これまでの先行研究における指摘や、自身が施設で働いてきた経験から、求められている児童養護理論とは、純粋な論理的思考の理論と、職員の子どもに対する営みである実践とが分ちがたく結ばれ、互いに互いを発展させる理論であると考える。

理論を構成するものとして、現実の実践対象の範囲と対象の性格に対して、将来像から導き出される人生の上での当該時点での子どもの状態から明らかにされた児童養護問題があり、児童養護問題に照らして職員の担うべき施設の原理と、原理に即した児童養護実践内容が示される。それらは同時に、児童養護理論の理念を実現する営みであるため、対象

となる子どもの将来像の実現を志したものとなる。

本研究では、ホスピタリズム論が理論構成要素をどのようにとらえていたかという視点を軸に、1950年代の『社會事業』や全国児童養護施設協議会発行の記念誌を中心にホスピタリズム論に関する文献を読み込み、考察を深めた。

３．倫理的配慮

自説と他説の峻別、引用の厳格性等、日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

４．研 究 結 果

ホスピタリズム論と一口に言っても研究者によって見解が異なり、同一の論者でも経年変化がある。

①子ども観：子どもそのものをどのようにとらえるかということは、ほとんど示されていなかった。堀（1955b）からは「くりかえし覚えこませねばならぬ」という大人中心の子ども観がうかがえる。**施設養護実践観**：里親が優位であり施設は妥協策である。施設を否定しているととらえられるものもある。谷川（1954）の研究においては理念と実践の統一を目指し最低基準が条件となることが記されているが、系統的な記述はなくホスピタリズムのひろがりを小範囲にとどめるために対策が箇条書きで列挙されているにすぎない。堀（1955a）は、すべての児童を通じて、児童養護とは児童人格形成でありその真髄は「取入れ」や「同一化」の働きやすい環境を整えることと主張し、施設養護について同一化が成立すれば「人格の修正や再調整が可能」とする。②実践現場へは、施設養護には根本的な欠陥があるということがホスピタリズム養護理論の施設養護に関する結論であり、当時養護施設業界をとりかこむ思想的空気は重苦しいものであった（全養協 1966：127-8）と受け止められている。対策とされた里親の委託率は 1951 年 19.27%、1961 年 18.64%であった。③要因として、第一に社会的存在としての子ども・施設の認識の不足（子どもの生活圏、政策意図の考慮不足）。第二に破壊的な論証。第三に目的の不在があげられる。

理論の脆弱さにとどまらず、現場の過密労働など理論を生かす条件が整わなかったことも考えられる。今後、理論を生かすことのできる労働環境の検討や、また、大戦後の戦災孤児の出現に合わせてホスピタリズムに注目が集まった点、現象だけをみれば虐待を受けている現在の子どもにも問題として残されている点があり、これらをどのように見ていくかが研究課題としてあげられる。

堀　文次（1955a）「施設児童の養護理論」『社會事業』38（3）、13-20。
堀　文次（1955b）「寮母の呼称とその根底にあるもの（二）高島巌氏の所論を駁す」『社會事業』38（6）、16-21。
大谷嘉朗（1960）「ホスピタリスムス論がどのように養護技術に生かされたか(第 12 回全国社会事業研究発表会報告第一部会児童の人格形成と環境について)」『社會事業』43（2）、53-58。
谷川貞夫（1954）「ホスピタリスムス研究（二）－その予防及び治療対策への考察－」『社會事業』37（9）、1-64。
全養協（1966）『二十年の歩み』。